
クズと死神と女神のモノガタリ。

オロチ丸W0632A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クズと死神と女神のモノガタリ。

【Nコード】

N2297F

【作者名】

オロチ丸W0632A

【あらすじ】

親父も、俺も、このクズだらけの世界を変えたかった。それが強い方法でも、法に反する方法だとしても、その方法を、選んだ。しかし、親父は、殺されてしまった。俺は、もう人間じゃない。“死神”だ。もう、後戻りは出来ない。

第1話：序章：死神誕生（前書き）

ほぼ毎回死人が出る予定です。

第1話：序章：死神誕生

——黒沢零司、19歳の冬——
くろさわ れいじ

「親父、何が有ったって言うんだ!？」

俺は、夜中にかかってきた電話に向かって、思わずそう叫んでいた。

《すまない、零司。お前にも言っていた、“デスサイズ”が『大和会』にバレた》

「ウソだろ……?」

『大和会』やまとかいとは、日本の裏社会を統括する組織だ。現会長は俺の曾祖父で、親父はその技術部長をやっている。
ひいじいさん

親父は、裏社会を見ていて、ぶっ潰つぶしたくなかったと言っていた。
“デスサイズ”も、その為に親父が組織に隠して作ってたんだ。

《残念だが、本当にバレていて……な。実は、さっき会長に撃たれた》

「え?」

それは余りにも唐突過ぎて、直ぐには理解できなかった。

しかし、止まった脳みそが動き出してみれば、声の様子がおかしかった事に気付く。

耳を澄ませてみれば、荒い息が聞こえる。

「会長に撃たれたって、会長からしたら、親父は孫だろ!?!そんな、何で——」

《……………》

「親父!しっかりしろよ!まだ、まだ死ぬんじゃないやねえよ!裏社会

をぶっ潰すって言ってたじゃねえか！こんな所で死んじゃったなら、裏社会をぶっ潰せねえじゃねえか！」

受話器から聞こえてくる、荒い息。そして、かすれるような声。

《零司……すまん、父ちゃん、もう駄目だわ。後は、任せる。俺の代わりに、腐った世界を、ぶっ潰してくれ……！》

「親父！そんな事言うなよ！俺だけでどうこう出来る訳ないじゃねえか！」

《零司。もう、父ちゃんは駄目なんだよ。急所は外したみたいだが、血がハンパじゃなく出てるんだ。もう、父ちゃんは助からない》
「親父！俺だけじゃどうこう出来ないし、裏社会をぶっ潰すのは誰がやるんだよ！死ぬな！」

俺は、とにかく叫び続けた。そうすれば、少しでも長く親父が生きていてくれると思ったから。

そう、本当は俺にも、分かっていた。耳を澄ませてみた時に、親父がもう助からない事を、分かってしまったていた。

だからこそ、必死に脳裏から追い出して、『死ぬな！』と叫んだのだ。

《零司、お前だけじゃ無理でも、“家”の奴らがいるだろ。それに、“デスサイズ”は既に完成している。隠し場所は、モグラに聞け。そこには、“デスサイズ”の設計図もある》

「な、何で今まで黙ってたんだよ！もっと早けりゃ……」

もっと早けりゃ、親父が撃たれる事も無かったかも知れないのに。しかし、その言葉は飲み込んで、口には出さなかった。

もう、助からないならば。せめて、安心して逝って欲しい。
だから、目元に浮かんだ涙を、手で擦り取って、親父を見送る事にしたんだ。

《じゃあ……後は、頼む……ぞ》

「……分かった。親父の変わりに、俺が、裏社会をぶっ潰してやるよ。だから、安心してくれよ」

《はは、どうやら、決心が、付いたようだな……。じゃあ、先にあの世で待ってるぜ。同じ所に逝けるかは分かんねえけどな》

「親父らしくねえな。あの世なんて、ある訳ないだろ？」

《はは……かも、な。じゃあ、おやすみ。会長が最後の情けで残してくれた時間も、もう無いみたいなんだな。》

「ああ、おやすみ。モグラに後は聞くとよ。」

《零司、お前の人生まで巻き込んでしまつて悪いと思う。しかし、父ちゃんには――》

「気にしなくて良いよ。俺は、もう“零司”じゃない。俺は、――」

「俺は、今日から“死神”だ。後は、“死神”に任せてくれよ」

俺は、親父の言葉を遮^{さへ}って、そう宣言した。

《はは、頼もしいな、“死神”さん。これで――》

それが、親父の最期の言葉だった。

俺は、必死で涙を堪^{こら}えた。

“死神”は泣かない。“デスサイズ”――死の鎌で、死をもたらし続けるだけ。

その日、黒沢零^{くろさわ れいじ}司は死に、一人の“死神”が誕生した。

親父――黒沢恵之助^{くろさわ けいのすけ}より託された、“デスサイズ”。そして、“

家”の人たちの力を借りて、俺は、悪人共をぶっ殺していく道を歩み始めた。

千里せんりの道も、一歩から。そんな諺ことわざが、脳裏のうりに浮かんだ。

第1話：序章：死神誕生（後書き）

毎日更新頑張ります！

第2話：黒菱自動車編1：心中計画

「阿久井さん、これ以上納品価格を下げられたら、ウチはやってけません！どうか、よろしくお願い致します！」

《黙れ！黒菱自動車くろびしの仕事をしたいという会社は、いくらでもあるんだ。ウチの言う値段で納品出来ないのなら、手を切るしかないな》

「そんな！私たちに死ねとでも言うんですか！？」

《ほう、一家心中かね？出来るものならやってみたまえ。じゃあな》

私のパパは、自動車の部品を作る会社を経営している。

でも、立場の違いを悪用されて、本来の値段よりも安い値段で納品しなければ、手を切られてしまうらしい。

有り得ないよね。私もそう思う。

でも、これが現実なんだ。

阿久井って奴は、正規価格と実際の納品価格の差を、懐ふところに入れる――横領よこりやうしているらしい。

でも、他の仕事がないから、無理してでも、阿久井の回してくる仕事を請うけるしかない。

こんな状況だから、私を高校に通わせてくれたのも、かなり無理してくれてたんだと思う。

大学は、諦めた。だけど、仕事は見付からない。

高校卒業から一年以内に仕事を見つけれなかったら、パパの会社就職する事にはなっているんだけどね。やっぱり、給料の良い

会社に就職して、少しでも家計を助けたい。
なのに。

「また、面接落ちちゃった……」

半年経った今でも、就職できないでいる。

水をゴクゴク飲みながら、何がいけないんだろう、と考えていた。

私は、白雲^{しらくも}厳太^{げんた}。五大家族の大黒柱だ。

といっても、経営している工場は、何とか生きて行ける程度しか、利益が無い。

言い訳ではないが、私のせいではない。納品先が、立場の差を利用して圧力をかけてくるのだ。

だが、全く収入がなくなれば、工場機械のローンを払えなくなってしまう。

だから、厳しくても、踏ん張るしかない。私の名に、『厳』の字があるのだから、頑張れる。

そう、思っていた。

でも、もう、これ以上は無理だ。

妻の美空^{みそら}はスーパーのレジ打ちのパートをしている。

長女の穂波^{ほなみ}は、奨学制度のある大学に、バイトをしながら通っている。

次女の優幸^{やさき}は、就職活動中だ。あと半年経っても就職できなかったら、私の会社に就職する事になっている。

長男の正示^{しょうじ}は、まだ義務教育中だ。

それなのに、この道を選ぶとしているなんて、なんと酷い人間なのだろう。

『一家心中』

遺書に、阿久井や黒菱自動車が悪事を、全て書いてやる。
もう、私達は地獄へ墜ちてしまう道からは、逃れられない。
けれど、私達だけでなく、奴らも、一緒に地獄へ――。

その日、私は無理心中することを決めた。
心中なんて話、相談するわけにはいかない。
私は、いるのかも分からない悪魔に、魂を売り渡した。

「悪人、発見。黒菱の阿久井、か。“死神”が地獄に墜としてやるよ。楽しみにしてな」

そんな声が、どこかで聞こえた――。

第2話：黒菱自動車編1：心中計画（後書き）

僕の不注意により、昨日（2008／10／5）の更新が出来ず
すみません。

第3話：黒菱自動車編2：白雲部品

「はあ……。一昨日の面接も、落ちちゃったな……。これでもう、この雑誌に載^のってる目ぼしい所は、全滅かあ。」

私は、家の近くの公園で、さっき買ったばかりのコーラを飲みながら、ため息をついた。

もう9月も半ばなのに、私に出来る仕事で、尚^{なお}且つ高給な仕事は、どこも既に募集を終えていた。

色々と就職雑誌を買ってみたのだけれど、目ぼしい所は、既に決まってしまうているか、落ちてしまった。

今の時期も、まだまだ暑い日差^{ひざし}しが、私の肌をチリチリと焼いてゆく。

「すみません、お嬢さん。この辺りに白雲部品^{しらくも}という会社がある筈^{はず}なんですが、どこにあるか知^しってませんか？」

男性の声で、フツと我に返る。いつの間にか、ウトウトとしてしまっていたみたい。

思わず欠伸^{あくび}をしてしまった私を見て、ウトウトとしていたのが分かったのか、

「す、すみません、起こしてしまいましたか？」

と聞かれてしまった。頬が、日差しのせいではなく、熱くなる。

こんな所でウトウトしてたなんて、恥ずかしかった。

「いえ、大丈夫です。白雲部品なら、私の父がやってる会社です

けど、ご案内しましょうか？」

「それは助かります。この辺りに来るのは、今回が初めてなもので。携帯もバッテリー切れになってしまってますね」

男の人は、昨日充電忘れていたからなんですけどね、と苦笑いをした。

それにしても、この人は、ラフな格好をしている。

白のタンクトップに、黒っぽいGパン。

顔もカッコイイし、直に見える腕は、引き締まっていて、良いなあ、なんて思ってしまった。

「あのー、私の顔に何か付いてます？」

そう言われて、彼を見つめていた事に気づき、顔中が熱くなる。やだ、何やってんの私。そんな場合じゃないでしょ！

今は、この人を案内しないと。

「あ、いえ。では、私について来てくださいね」

私はそう言いながら、コーラの空き缶を、ゴミ箱に放り込んだ。

「パ……、じゃなくて、父さーん、お客さんだよー」

工場に着いて、パパを呼ぶと、

「分かった、今行く！」

直ぐに返事が返ってきた。

「優幸、こちらは？」

パパにそう聞かれ、まだ名前を聞いてない事を思い出した。

「え、えーと、その……まだ」

「私は、黒沢零司くろさわ れいじという者です。白黒つけるの黒に、金沢の沢、漢数字の零に、司と書きます。あ、これ名刺めいしです。」

パパが名刺を見ている間に、彼は私にウインクした。
フォローありがとう、という意味で、私もウインクを返した。
すると、彼は優しい微笑を見せる。

良い人だなあ、そんな事を、考えてしまい、また顔が熱くなってきた。

彼は、パパが名刺から顔を上げるのを見るなり、私達に向かってこんな事を言った。

「白雲巖太さん、次女の優幸さん。

そしてここにはいませんが、奥さんの美空さん、長女の穂波さん、長男の正示さん。

黒菱自動車の阿久井に苦しめられているようですね。

“復讐”したいとは思いませんか？

このままだと、一家心中じゃないでしょうか？

今まで阿久井が懐に入れていた金も、取り戻して差し上げますよ。この“私”がね。」

熱くなっていた頬が、一気に冷たくなってしまった。

何者なんだろう、この人は。そして、何をしにきたのだろうか？

工場の作業音が、どこか遠いものの様に思えた。

第3話：黒菱自動車編2：白雲部品（後書き）

僕の不注意により、日替わり後の更新となりすみません。

第4話：黒菱自動車編3：私たちのヒーロー

「黒沢さん、貴方は一体何者なんですか！？どうして、黒菱自動車くろびしの阿久井あくいの事を知っているんです！？」

パパが叫ぶように言った言葉は、私も思ったことだった。

何故、初対面のこの人が、私たちのことを知っているのだろうか。

それに、彼の言った『このままだと、一家心中しかないでしょう？』という言葉が引っ掛かるな。

最悪の場合でも、自己破産すれば、命までは取られない筈なのに。

そこまで考えて、ふと脳裏のうりに浮かんだ事が有ったけど、口に出す前に、彼自身が言葉にした。

「“私”——いえ、“俺”は、貴方方を“助けに来たんです”。『大和会』やまとかいの魔の手からね。失礼ですが、厳太さんげんた。貴方、『大和会』から借金をしているでしょう？『大和会』は、容赦ないですよ。借金を返せなかったら、人身売買・臓器売買、何だってやって回収しますよ。……知らなかったわけじゃないでしょう？」

予想が的中していた事に、愕然がくぜんとする私。

物音がして見てみれば、そこには目に涙を溜めたながら、地面にへたり込む、パパがいた。

「あの時は仕方なかったんだ！それでもしなきゃ、路頭ろじうに迷う所だったんだ！」

そう叫んで、齒を食い縛るパパに、彼の言うことが、嘘うそではない事を知り、目の前が真っ暗になる。

思わずふらついた私を、優しく支えてくれながら、彼は続ける。

「たったの五万が、高く付きましたね。まあ、銀行もその時には既に貸してくれなかったんですから、仕方なかったのかも知れませんが。でも、『大和会』の借金は、違法な利子が課せられますからね。彼らは、相手が誰であろうと、殺すときは殺します。だから、警察も動かない。警察官だって、家族を人質に取られ、惨殺^{さんさつ}すると脅^{おど}されれば、そうするしかないですから」

そこで、彼は優しい視線を、私にくれた。そこで、まだ彼に支えられたままだという事に気付き、こんな時だというのに、頬^{ほほ}が熱くなった。だけど、私の足は、まだ役割を果たしてくれないから、このままにいるしかなくて、恥ずかしくて目をそらした。

彼の声が、優しく聞こえる。

「家族を守りたかったから、『大和会』から借金をして。今度は、家族を酷^{ひど}い目に合わせたくないから、一家心中を考えて。でも、もう大丈夫ですよ。“俺”が、阿久井から金を取り戻しますから。こんな可愛い娘さんを、死なせたりしたら、日本に取って大きな損失ですから」

当たり前の事を言うように、とっても恥ずかしい、けれどとっても嬉しい事を言われて、頬だけじゃなく顔全体が、熱くてたまらなくなってしまう。

ドクン、ドクン、と脈打つ心臓の音が、とてもうるさく聞こえた。

恐ろしい現実から、彼が助^{ヒーロー}けてくれる。

いつの間にか、私は彼——黒沢^{くろさわ}零司^{れいじ}さんを、信頼しきっていた。
黒沢さんの、正体も知らずに。

第4話：黒菱自動車編3：私たちのヒーロー（後書き）

更新計画無視してすみません。

第5話：黒菱自動車編4：平和な時間

「では、今日はこれで帰りますね。阿久井あぐいに後悔させてから、取り戻した金を持って来ます」

そういつて、黒沢さんくろさわは帰って行った。

「優幸やさき、まだまだ国も捨てたもんじゃないな」

「え？何で国が関係あるの？」

パパの言葉に、『？』マークを浮かべる私。

パパは、意外だ、というような顔をして、

「なんだ、聞いてたのかと思ったよ。ほら、この名刺めいし見てみろ」
黒沢さんの名刺を見ると、

『警視庁特務二課

黒沢零司くろさわ れいじ』

と書かれている。だけど。

「でも、電話番号とかは書いてないんだね」

そう、たったの二行だけで、連絡先が書いていなかった。

「きつと、特殊な部署だから、みだりに書けないんだろうな」

そこで、パパの顔つきが変わった。どこか意地の悪い顔へ――。

『え？』と思う間もなく。

「電話番号が気になるとは、もしかして黒沢さんに一目ぼれしちゃったのか？さっきも顔赤くしてたしな」

「え、そ、そんなんじゃないよ！ふ、普通連絡先とか、書いてあるでしょ！？だから、ちよっと気になっただけで……。顔赤かったのは、えと、その、は、恥ずかしかったからで……」

「恥ずかしかった、って何がだ？」

「そ、それは……」

黒沢さんに支えてもらった事とかを思い出しちゃって、また顔が熱くなってくる。

「お、顔赤くなってるぞ。父ちゃんは、良いと思うぞ、黒沢さん」

「……」

私は、黙って右手をグーにする。

「ちよ、ちよっと待て、優幸！目がちよっと怖——」

「パパの馬鹿！」

そう言いながら、私は迷わず右手を放った。

「イタタ、ちよっとは手加減しろよ……」

「からかうのが悪いっ！」

腹をさするパパと、にらめっこする。

だけど、次の瞬間には、私もパパも、笑っていた。

「おお、そうだ。この事を、皆にも言わないとな」

「そうだねっ、パパ！」

その晩、久しぶりに、笑いながらご飯を食べた。

楽しい話をしながら食べるご飯って、こんなにも美味しかったんだ。

忘れていたこの味を、思い出させてくれた、あの人。

黒沢さんと、いつかこうやって食事したいな。

そう考えて、その意味する事に気付き、本日何度目なのか、頬が熱くなった。

「あら、優幸。顔真っ赤にして、何考えてるの？」

そう言って微笑^{ほほえ}む、お姉ちゃん。

「穂波^{ほなみ}姉ちゃん、そんなの昼間の黒沢さん……だっけ？の事に決まってるじゃん！」

そう言ってニヤニヤ笑う、正示^{しょうじ}。

「もう！2人の馬鹿！」

「あはは、ゴメンゴメン。でもさ、俺、嬉しいんだよね。優幸姉ちゃん、最近無理してそうだったからさ。なんというか、安心した」
「私もよ、優幸。今の優幸、いい顔してるもの。困った事があったら、何でもお姉ちゃんに聞いてね？」

「……ありがとう、2人とも。だけど、ほんとに違うんだからね？」

一瞬の沈黙の後で、2人はクスクス笑い、そして気が付くと、私も、パパもママも笑っていた。

笑いながら、この平和な時間に感謝した。

こんな時間が、ずっと続くと良いな。

そしてやっぱり、黒沢さんの事を考えてしまう、私なのだった。

それは、久しぶりに訪れた、家族の平和な時間。

そして、動き出した私の初恋。

——けれど。

私たちの日常を守るため、一人の人間が殺される。

犯人は、私の初恋の相手。

この時の私は、“まだ” そんな事は知る由もなく、久しぶりの平和な時間を過ごしていた。

近いうちに、大きな決断を迫られるとも、知らずに。

第5話：黒菱自動車編4：平和な時間（後書き）

更新頑張ります！

第6話：黒菱自動車編5：阿久井殺害計画

「さて、と。阿久井あくいの情報は……」

俺は“家”に戻ると、もう一度阿久井の情報を確認する事にした。

「黒菱自動車くろびしの製造部副部長。妻子はなく、横領した金はキャバクラで豪遊するのに使っている、か。全く、あんな所のどこが良いんだか、分かん」

前に一度、キャバクラに忍び込んだときの事を思い出し、ついでに思い出したいくない事も思い出し、全身に鳥肌が立った。

「いくら何でも、二度と女装あんなことはしたくねえぞ。まあ、今回は黒菱自動車本社で始末するか」

後は、どうやって金を引き出すかな。

「今回は、俺の取り分も含めて、5,000万。なにせ、世界有数の自動車会社だ。阿久井ヤツの地位も考えれば、それ位の金は取れるだろう。問題は、阿久井ヤツを見捨てて黒菱がトカゲの尻尾切りしつぽを図った場合だな。企業イメージも有るから、素直に金を出してくれるだろうが、逆に、阿久井ヤツを懲戒免職ちようかめんしよくなりなんなりしてくる可能性もある。さて、本社の図面は、つと」

俺は、明後日あさっての本社潜入に備え、モグラより買った情報を再確認する。

資料を確認していて、白雲優幸しらくも やさきの写真が目に入った。
何故だか、胸の奥が熱くなる。

「この娘こ、髪や目の色は違うけど、お袋の若い頃の写真に、似てるんだよな。だから、なんだろう」

俺はそう結論付けると、頭に入れた図面が間違っていないか、再確認することにした。

前夜。

俺は、強化服『デスサイズ』の点検をしていた。

くろさわけいのすけ
黒沢恵之助より託された、悪人の命を刈る死の鎌。

俺の思考を読み取って、自由自在に動くワイヤー。あちこちから出す事ができて、もちろん、特殊な素材で出来ている。正確には、ロボットに分類されるのだろう。コレを使えば、ビル街を飛び回る事ができる。

小型ながらも、高性能なコンピューター。水鳥みどりが作ってくれた、セキュリティーを突破するためのプログラムを動かすには、必要なモノだ。

他にも、力を増幅したり、防弾機能があったり、色々有る。

恵之助が、俺に託した思い、そして願い。

この“死神”が、現実のものにしてみせる。

このクズだらけの世界を、変えてやるよ。

俺なら、『デスサイズ』なら、それが出来る筈だ。

天才・恵之助が、作ったモノなのだから。

「社長、わざわざお越しにならなくとも、こちらから参りましたのに」

「社長室では話せないことなのだよ、阿久井君。ここでも話せない事なのでな、第4会議室まで付いてきてくれたまえ」

社長の後を付いていきながら、俺は考えた。

第4会議室——防音加工されており、この部屋だけは、防犯カメラも部屋側から切ることが出来るようになってる。

普通の会議室としても使えるが、会議室として使う場合は、幹部クラスの最重要会議に使われる。

製造部副部長の俺に考えられるのは、その目的で使われることは滅多にない方なのだろうか。

マズイ、“あの事”がバレたのだとすると、俺は終わりだ！

第4会議室に着くまでの間、そして社長が防犯カメラを切り、こう告げるまでの間、俺は死刑執行を待つ、死刑囚のような気分だった。

「阿久井君、これはまだオフレコなのだが、ワシは次の人事異動で、君を部長に昇進させようと思っておるんだよ。引き受けてくれるかね？」

地獄から天国に出たような、そんな気持ちになる。

私でよろしければ、お引き受けいたします。そう、即答したのは、言うまでもない事だった。

第6話：黒菱自動車編5：阿久井殺害計画（後書き）

風邪を引いてしまい、今日は外出できないので、昼でも更新します。

第7話：黒菱自動車編6：5,000万没収

「さて、阿久井^{あくい}から金^{かね}を奪^{うば}ってきますか！水鳥^{みどり}、俺が留守している間、“家”を頼むぞ！」

「ええ、留守は任せてください。今日の夜は、何にしましょうか？」

「そうだな……。チャーハンを頼む。じゃあ、行って来るわ」
「行ってらっしゃい」

そして、“死神”は出陣した。

俺は、ビル街を飛び回り、黒菱自動車本社を目指す。

夜のネオンが、空^{むな}しい輝^{かがや}きを放^{はな}っていた。

「今の時間、阿久井^{やくい}は副部長室にいるはずだ。ククツ、後、3分程度で着く。それまで、せいぜい、残り僅^{わず}かな平穩を楽しむんだな」
俺の独り言を聞くものは、何も無かった。

「うう、何故だか悪寒がするな。風邪でも引いたか？早く仕事を済ませて、今日は早めに寝るとするか」

俺は、仕事を再開した。

それにしても、今日はいつもよりも仕事が多いのは、何故だ？

ふと、何気なく俺は、今いる部屋を見渡した。

「この部屋とも、もうすぐお別れだな」

そして、思わず笑みが出る。

「とうとう、俺も部長かぁ。ククク、これでもっと遊べるぞ」
行きつけのキャバクラの中で、一番のお気に入りの娘を思い出すと、顔がにやけてくる。

しかし、ここが会社だという事を思い出し、慌てて顔を引き締める。

幸い、“誰もいなかった”ので、ホッとする。

しかし、次の瞬間、異変に気付く。

「なんで、秘書の松田君までいなくなっているんだ？」

その質問に答えたのは、見知らぬ声。

まるで、機械で合成したかのような、声だった。

「俺が、外ニ呼ンダノサ。オ前ト2人ツキリニナリタカッタカラナ」

背筋に、いや全身に、鳥肌が立った。

「だ、誰だ！」

と、怒鳴りながら声のする方を向く。

「……ロボット？」

それが、俺の抱いた印象だった。

「……ロボット？」

ヤツの呟きに対し、俺はこう答える。

「イイヤ、俺ハレッキトシタ人間サ。声ハ変エテアルシ、特殊ナ服ヲ着テイルケドナ」

「何のようだ？」

そう問いながら、机の下に手をやる。

恐らく、警備の者を呼ぶつもりなのだろう。

「無駄ダヨ、警備室ノ人間ニハ、眠ッテモラッテイル。素直ニ、俺ノ言ウ事ヲ聞イタハウガ良イゾ？死ニタク無ケレバナ」

そう言いながら、右腕から出したワイヤーでヤツを縛り上げる。

「な、何者だ！」

真っ青な顔をするヤツに、俺は告げる。

「俺ハ、“死神”ダ。オ前ノ命ヲ奪^{ウバ}イニ来タ。タダシ、オ前ガ助カル方法ガ、タッタ一ツダケアル。聞キタイカ？」

当然ながら、聞きたいと言ったヤツに、俺は条件を突きつける。

仮に飲んだとしても、殺される事に代わりの無い、空しい条件を。それでも、ヤツは飲むしかない。有りもしない可能性にかけて。

「5, 000万ダ。5, 000万ノ金ヲ出セバ、命ダケハ助ケテヤロウ」

「そ、そんな大金、有る訳が……！」

俺は、止めを刺す。

「5, 000万出サナイノデアレバ、死ンデモラウシカナイナ。

……楽ニ死ネルトハ、思ウナヨ？」

そう言いながら、今度は左腕から出したワイヤーで、ヤツの喉^{のど}を突^つく。

「わ、分かった！5, 000万出す！だから今日は一旦帰つてくれ！」

「ソウ言ッテオイテ、後デココノ警備ヲ厳^{キビ}シクスルツモリナンダロウ？ソノ手ニハ乗ラナイヨ」

「じゃあ、どうしろって言うんだ！」

「ククク、俺ノ言ウ通りニスルンダナ」

脂汗まみれのヤツは、分かった、と小さく呟いた。

第7話：黒菱自動車編6：5,000万没収（後書き）

企画の投稿期限に、間に合うのだろうか（滝汗）
ギリギリまで頑張ります！

第8話：黒菱自動車編7：死刑執行

「ああ、俺はもう、終わりだ……」

どこのどいつか分からないが、あの侵入者に脅おどされて、俺は社長室に小切手帳を盗みにきた。

それにしても、なぜあの侵入者は、金庫の位置や開錠かいじょうの方法を知っていたのだろう。

言われたとおりに開錠しながら、俺は疑問に思った。

金庫から小切手帳を取り出し、副部長室に戻りながら、侵入者アイツの言っていた言葉を思い出した。

『逃ゲヨウナンテ思ウナヨ。モシ逃ゲタリナンカシタ時ニハ、ドウナルカ……分カルヨナ?』

具体的なことは何も言わなかったが、絶対殺される。それだけは、分かってしまった。

「俺はまだ、死にたくない!」

アイツの待つ部屋への道のりを、急いだ。

「クク、遅カッタジャナイカ。アト少し遅カッタラ、死ヌトコロダッタゼ? 危ナイ所ダッタナ」

どうやら、俺はギリギリだったらしい。

思わず、安堵あんどのため息が出る。

これで、命だけは……。そう思ったときだった。

「次ハ、俺ノ言ウトオリニ遺書イシヨヲ書イテモラオウカ」

目の前が、真っ暗になった。

「戸籍上ハ、死ンデモラウ。實際ニハ生キテイテ良イケドナ。ソノ為ニ、オ前ノ書イタ遺書ガ必要ナンダ。逆ラウナラ、殺ス」

侵入者^{コイツ}の言う事は、こうだ。

俺が生きていては、警察が捕まえに来る。

だから、戸籍上は死んだことにして、コイツの組織の中で生きていけ、と。

得体の知れないワイヤーらしきもので突^つかれながら、俺はコイツの指示に従うしかなかった。

まだ、死にたくない。ただ、その一心だった。

「か、書き終わりました、えと、死神様」

一通り確認すると、俺は告げた。

「チャント書ケテイル。デハ、命ダケハ助ケテヤロウ。明日ノ夜、オ前ヲ迎エニ来ル。ソレマデ、乗り切ルンダナ」

力が抜けてイスに座り込んでしまった阿久井^{ヤツ}を置き去りにして、俺は黒菱自動車本社を後にした。

もちろん、全ての監視カメラの映像を、ヤツが副部長室から出て、社長室まで小切手帳を盗みに行った映像に書き換えるのを、忘れずに。

手元にある、ヤツの遺書と小切手帳を落とさないように、俺はビル街に消えた。

夜のネオンが、空^{むな}しい輝^{かがや}きを、続けていた。

「うむ、今日も良い天気じやのう」

ワシ——黒菱自動車社長、相崎勝太郎^{あいさきしょうたろう}は、清々（すがすが）しい朝を迎えていた。

——筈だったのだが。

“死神”と名乗る、ロボットのような侵入者が、ワシの部屋に来たことによって、清々しい朝は消えてなくなってしまった。

「それで、死神さん、でしたかな。まさか、ワシを殺しに来たとしても？」

「イエ、ソウデハアリマセン。私ノ名前ハ、オ気ニナサラズ。今日ハ、オ宅ノ阿久井^{アクイ}サンガ、昨晚不正ヲ行イマシタ。ソノ証拠ヲ私ノ組織ガ入手スル事ニ成功シ、ソノ証拠ヲ5,000万デ買ッテモライニキマシタ。拒否スレバ、ソノ証拠ノ一部ガ、一般ニ流レマス」彼の問いに、俺はそう返した。

「ほう、うちの阿久井が、ですか。ワシを脅迫^{きようはく}するからには、今証拠をお持ちなのでしょくな？」

「モチロン、持ッテイマスヨ」

俺は、例の小切手帳^{しめ}を示す。

「そ、それは……！」

愕然^{がくぜん}とする彼に、もう一つの証拠を突きつける。

「昨晚ノ防犯カメラノ映像ヲ確カメテ御覧ナサイ。全テノカメラノ映像ガ、阿久井サンガコノ小切手帳ヲ盗ミ出ス映像ニ書キ換エラレテイル筈デス」

何という事だ！

あの阿久井君が、自分の意思でこんな事をする筈がない。

そういえば、コイツは、防犯カメラが書き換えられている、と言ったな。

きっと、この死神と名乗る奴に脅おどされたのだろう。

「死神さん、あなたが本気だという事は、分かりましたよ。その証拠を5,000万で買い取れば、二度と黒菱自動車には関わらないと、約束していただけますか？」

「上カラノ指示ニハ逆ラエマセンノデ、ソレハ出来マセン。デスガ、コノ小切手帳ガ一般ニ流レレバ、オ宅ハ終ワリデショウ？素直ニ、5,000万出シテ頂ケレバ、コノ事ヲ公表シタリハシマセン」

「私モ、殺人ハシタクナイノデ、決断ハ早メニオ願イシマスヨ？」
ワシは、コイツのこの言葉で、5,000万をポケットマネーから出す事を決断した。

「阿久井君は、我が社わに取って必要な人材かんべんなのです。私のポケットマネーから出しますので、今回は勘弁もらして貰えませんか？」

コイツは、ゆっくりと頷き、

「アリガトウゴザイマス。コレデ私モ死ナズニ済ミマス」
と、言った。

「デハ、失礼シマス」

俺は、相崎邸を後にすると、右手に持った5、000万の現金が入ったケースを落とさないように、姿を消した。
これで、後は阿久井を殺すだけだ。

死神とやらが金を持って帰った後、なにやら胸騒ぎがして、本社に急行する。

ワシは本社に着くと、直ぐに製造部副部長室に向かった。
そこで、ワシが目にしたのは。

「何と……何と惨い事（むじ）を……」

ワシは、何十年かぶりに失禁し、そのまま意識を失ってしまう。

そこには、惨殺（ざんさつ）された阿久井君の死体が、床に転がっていた。
そこだけは無傷な、彼の顔は、恐怖の色に染まっている。

机の上には、『遺書』と書かれた封筒が見え、壁には、

『悪人の命（か）を刈る死の鎌、『デスサイズ』。死刑執行、完了。』
と大きく血文字で書かれていた。

「さて、今日はこれから、どうしようかなあ」
そんな呟きが、どこかで風に消えた。

第8話：黒菱自動車編7：死刑執行（後書き）

企画の締め切りに間に合わなくて、すみません（滝汗）

第9話：黒菱自動車編8：初めてのデート

「白雲しらぐもさん。このケースの中には、2,000万入っています。これだけ有れば、『大和会やまとかい』の借金を返してもまだ、工場機械のローンの滞納金たいのうきんも払えるでしょう」

半分泣きながら、ありがとうございます、と礼を言うパパ。

私は、複雑な気持ちになっていて、何も言えずにいる。

もう、ここで別れば、二度と黒沢くろさわさんとは会えない。

けれど私は、彼に惹かれてひいる事を自覚ひしていて。

本当に、ここでこのまま別れてしまつて良いのだろうか？

そんな事を考えているうちに、別れの時が来てしまう。

「では、さようなら。“私”の事は、絶対に誰にも言わないで下さい。公式には存在しない部署ほくしょなもので」

そう言つて微笑ほほえむと、黒沢さんは、工場を出て行つてしまった。

「とうとう……何も言えなかったな」

力なくつぎや呟く私の耳に、聞こえてくるのは、二度と聞けない筈はずの声。

「何をです？」

慌あわてて顔を上げると、そこには、黒沢さんがいた。

「く、黒沢さん!？」

驚く私おしに、彼は言う。

「すみません、ちよつと忘れ物をしてしまいましたね。私の名刺めいしがあるでしょう？」

「え、はい、有りますけど」

「あれ、返してもらえませんか？私の部署が存在する証拠を、残

しておくわけにはいかないもので」

目の前には、頬^{ほほ}をかきながら苦笑いする彼。
これはきつと、神様がくれた、最後の機会^{チャンス}なんだよね。

名刺を渡すと、私は、勇気を出して、声に出す。

「こ、今度、私とデ、デートしてくれませんか？」

か細い上に、少し裏返っていたけど、彼には届いていたみたいで。
びっくりしたように瞬^{まばた}きすると、やさしい笑顔を見せてくれた。
顔が、火傷^{やけど}しそうなくらい、熱い。

びっくりした。

まさか、デートに誘^{さそ}われるとは。

『今度の土曜日の、朝。あの公園で』

真っ赤になった少女に、そう約束して、俺は帰路^{きり}に就^つく。

何故^{なぜ}、また会おうと思ったのかは分からない。

白雲優幸^{しらくも やいぎ}が、お袋に似ているからなのか、それ以外の理由なのか
……。

彼女を思い出すだけで、胸の奥が熱くなる。

頭の中から、彼女の曾祖母^{そつそば}譲^{ゆず}りの、綺麗な金髪と茶色の目が、離れなかった。

「髪や目の色は違うけど、お袋の若い頃の写真にそっくりだからだよな」

その日は、そう強引に結論付けて、眠りに就いた。

……夢の中にまで、彼女が出てきたけれども。

「きゃー、どうしょ、何着てこ〜♪」

その日の晩、私は今度の土曜日、何を着ていこうか、選んでいた。前の日になって決めるなんて、そんな事はしない。

だって、そんなの失礼じゃない？

ようやく着ていく服を決め、ベッドに横になったのは、日が変わってからだった。

私の頭の中は、黒沢さんのことで一杯で、就職活動だとか、そういう事はみんな忘れていた。

「今日は、良い夢見れそう」

私はそう呟くと、電気を消して、夢の世界へと旅立ったのだった。

第9話：黒菱自動車編8：初めてのデート（後書き）

風邪で今日も休んでいるので、更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2297f/>

クズと死神と女神のモノガタリ。

2010年11月14日21時38分発行